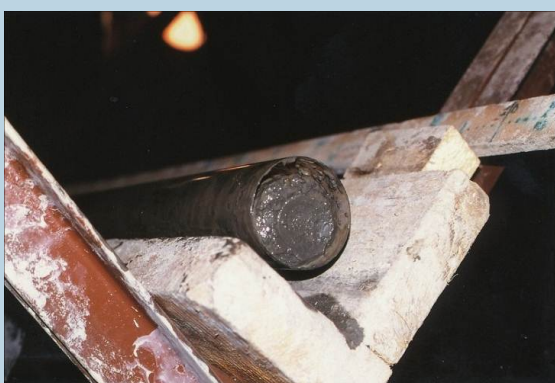


世界最古の湖から発見された 花粉化石が語ること



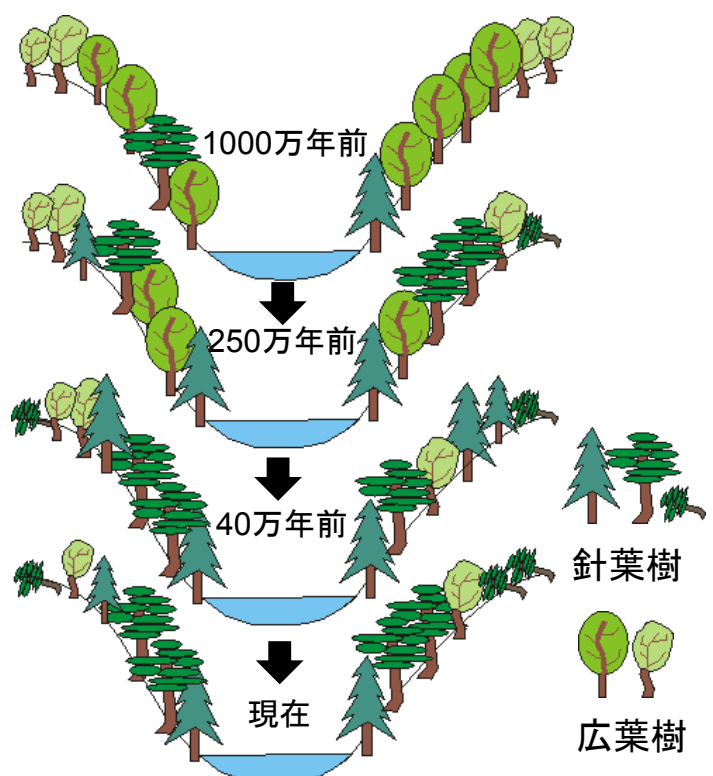
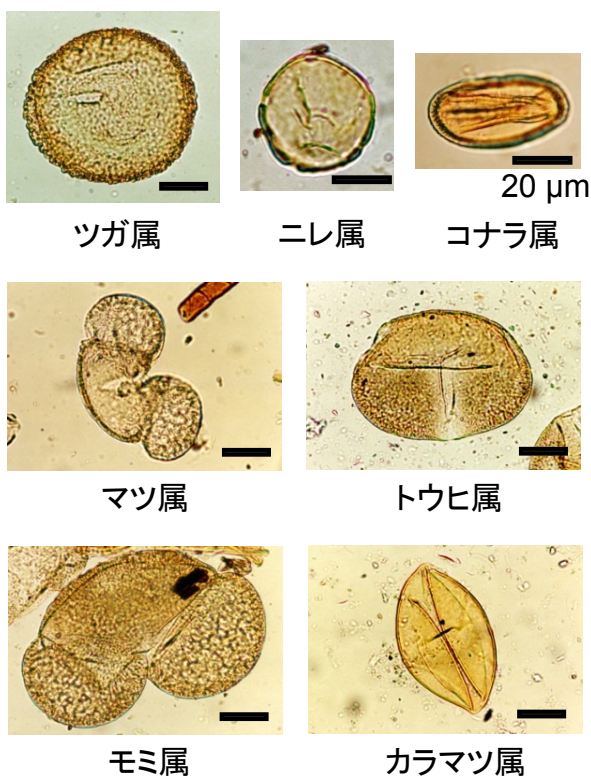
ロシア・バイカル湖から発見された花粉化石の分析結果から明らかになった、過去1000万年を超える植生と気候変化について紹介します。

講師 志知幸治（立地環境研究領域）

バイカル湖の花粉が語る太古の植生と気候

バイカル湖は約3000万年間の歴史を持つ世界最古の湖であり、湖底にはその間の堆積物が連続してたまっていると言われています。バイカル湖周辺の過去長期間の環境変動を明らかにするために、1990年代後半にバイカル湖の湖底堆積物(コア)が掘削されました。森林総合研究所と東北大学、京都府立大学、岡山理科大学、熊本大学のグループは、コアに含まれる花粉化石を調べることにより、過去1200万年間の植生変遷と気候変動を明らかにしました。

花粉化石の種類の変化から、過去1200万年間に温帯性の落葉広葉樹林から亜寒帯針葉樹林(タイガ)へと次第に代わっていったこと、ツガ属、ニレ属、コナラ属などの温帯性の属種が約250~100万年前に消滅したこと、100万年前以降ではマツ属やトウヒ属などのタイガが拡大した時期よりも、植生の乏しい時期が長く続いたことが明らかになりました。こうしたバイカル湖周辺の植生変遷は、過去1200万年間に起きた地球規模の気候変動と対応していたことがわかりました。



産出した花粉化石

バイカル湖周辺地域の植生変遷の概略